

民俗誌研究の frontline
— 岩手県遠野市・宮崎県椎葉村での研究／生活 —

椎葉民俗芸能博物館 山奥学芸員
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科 博士課程学生
森内 こゆき

【発表の流れ】	はじめに__研究の出発点
	1. 民俗学とは何か__2つのフィールドにおける「民俗」
	2. 民俗文化と地域づくり① 岩手県遠野市の事例
	3. 民俗文化と地域づくり② 宮崎県椎葉村の事例
	おわりに

はじめに__研究の出発点

発表者は、「資本主義の限界のただ中にある今、わたしたちはどのような社会のしくみに活路を見出すべきか」という問いを研究の出発点としてきました。資本主義の限界とは、例えば、環境問題や経済格差、エッセンシャルワーカーの貧困・子育てによる貧困、過労問題といった、ひと昔前から現在に至るまでずっと解決されないままにちこちで噴出しつづけている社会問題のことです。資本主義と資本拡大をすすめるネオリベリズムは、科学技術革新によってわたしたちの生活をよりいっそう楽にする、よりいっそう豊かにすると考えられていましたが、そうではないことが明らかになってしまったのが今の時代なのではないでしょうか。一見個人ひとりひとりの責任に思えるような問題も、実は社会のしくみが原因となっていることがあります。

これら問題を解決するヒントが、それぞれの土地の風土にみあった暮らし、すなわち民俗文化のなかにあると発表者は考えています。そこで、各地に暮らす人たちの"ふつうの日常"の暮らしぶりを観察するフィールドワークを実践してきました。わたしは住み込みで長期間フィールドワークを行うことが多いので、研究をしながらその土地で生活することにもなります。本発表では、フィールドにおける研究者としてのわたしの見聞と、生活者としてのわたしの経験の双方をご高覧いただきます。わたしたちの暮らしと、わたしたちのまちの博物館を今どうするのか、検討するための材料としていただけますと幸いです。

「資本主義とはまったく異なった人間と自然の物質代謝の管理の仕方が__それがたとえ伝統や慣習に基づく制度によるものであり、近代自然科学による自然法則の認識によって意識されていなくとも__より持続的な生産を可能にしており、その力が資本に対する抵抗の物質的基盤になりうる」

斎藤幸平『大洪水の前に』317頁

1. 民俗学とは何か__2つのフィールドにおける「民俗」

わたしには2つの調査地があり、そのどちらもが民俗学史上重要な役割を演じてきた地域です。その2つの調査地というのは岩手県遠野市と宮崎県椎葉村であり、両地域に共通しているのは、日本民俗学の祖・柳田国男が著した作品の舞台であるという点です。両地域では、それぞれのしかたで民俗学と民俗文化を生かした地域づくりが実践されてきました。本発表では、2つの地域を比較しつつ、それぞれの地域における民俗研究の現在をお伝えできればと思います。ここではまず、遠野と椎葉について紹介しながら、そもそも「民俗学」とはどういった学問であるかを検討してみます。

岩手県遠野市は、柳田国男著『遠野物語』（1910）の舞台として知られています。『遠野物語』は、遠野の神霊や妖怪に関する不思議な119の話を採録した民譚集です。河童や座敷童子にまつわる伝承をご存知の方も多いのではないのでしょうか。『遠野物語』に記録された昔話の魅力は、物語の登場人物や場所を現在も辿ることができる点にあります。「河童の子を産んだ話はどここの誰々さん家の話だ」「誰々さんは天狗に会った人の子孫だ」などというように、遠野において神様や妖怪は現実の話なのです。物語が史実（現実）として語られる背景には、柳田が怪異譚を村社会の現実として記録しようとした思惑とともに、『遠野物語』を起点として進められた歴史考証研究の蓄積があります。学者による研究のみならず、**遠野市民によって構成された研究団体「遠野常民大学」**による調査も進みました。現地に住まう一般の人々が生活に根ざした実地調査を行った結果、妖怪や神様が遠野の生活世界においてどのように立ち居振る舞い、どのような力をもっていたのかが明らかにされたのです。ここで「常民」とは、柳田民俗学における重要な用語のひとつです。「常民」は農民や庶民、平民、民衆と似て非なるもので、これら特定の人々を対象としながらも、より普遍的で抽象的なことがらを表す研究概念でした。すべての日本人のなかにある普遍的な生活様式や思考法、心理が「常民」であると考えれば、柳田民俗学の射程がクリアになってくるかもしれません（谷川 1962, 後藤 1964）。

「常民というときには、英語でもコンモン[common]という言葉を使う。コンモンズという言葉は卑しい意味はないのだということをイギリス人はなんぼ講釈したかわからない。フォーク[folk]というのでもそれ自身が見さげたことではない。（中略）ですから私は庶民という言葉を使いたくなかった。平民という言葉はつい士族という言葉と対立するので、それも使わないとすると、何かイギリスのコンモンという言葉が使いたいというので、（中略）その意味で常という言葉を使ったのです。」

柳田国男「日本文化の伝統について」『近代文学』1957

□内は発表者註



宝暦～天明の飢饉（1755-65）死者供養のために義山和尚が岩々に線彫した遠野五百羅漢像（2021）



遠野で地域史研究を行う富川岳氏が作成したりサーチマップ。『遠野物語』の舞台や関連文献をまとめている（2021）

もう一つの調査地である宮城県椎葉村は、柳田国男著『^{のちのかりことばのき}後狩詞記』（1909）の舞台です。日本三大秘境に数えられるほど山深く、昭和に入るまで主要な生業は山地農法である焼畑でした。『後狩詞記』は、ここ椎葉の猪狩りの儀礼について記録した巻物を書き写したものであり、柳田最初の民俗学的作品（民俗誌）と言われています。『後狩詞記』に記された儀礼とは、たとえば山に入るときの作法や猟犬の葬送儀礼、山の神祭です。柳田は、椎葉の山奥に住まう文字の読み書きをしない人々が精緻な“文化”を伝承してきたことに感銘を受け、明治の過渡期にこの文化を記録しておかねば、いつか消えてしまうのではないかと直観的に危惧したと考えられています。

『後狩詞記』に書き留められた山言葉や儀礼作法の一部は、現在でも椎葉の猟師たちによって継承されています。実際に、狩猟に限らず焼畑農業や芸能祭祀（神楽）など、**多くの自治体で消滅してしまった民俗文化が今も生活のなかに息づいている**ところが椎葉村の特異性です。椎葉村では、明治期の時点で柳田が消滅すると懸念していた民俗事象が、今なお生活のなかに残されているのです。



椎葉神楽祭の神事「板おこし」（上, 2023）
猟師が諏訪の祓を唱え、猪を捌き山神と参加者に
振る舞うところから祭りは始まる



「仙人の棚田」と称される椎葉村の棚田（右, 2023）

柳田国男が『後狩詞記』と『遠野物語』にのこした民俗学という学問の特徴は何でしょうか。民俗学は、第一に、すべての人間の生活者としての側面、つまり暮らしを研究対象にしています。この点において、歴史学と民俗学は対照的です。「歴史」とは、時の為政者の視点から描かれた過去の出来事の羅列です。「歴史」からは社会の大多数を占める一般人の生活が取りこぼされています。そこで、**地域社会の担い手であった無数の名もなき人々、文字の読み書きのできない平民、貧しい農民の視点から、これまでに見えてこなかった新たな歴史を描く民俗学**を志しました。『後狩詞記』はまさに平民の生活誌を描いたものと言えます。

さらに、柳田の研究概念であった「常民」は、「歴史」が孕む身分差や階級差を乗り越えつつ、よりいっそう普遍的に、すべての日本人に共通する生活の思想（精神性）を示します。柳田が『遠野物語』に著されたような民間伝承を蒐集したのは、物質文化のみならず心意伝承を記録分析することを重視したからです。ところが、民俗学は一国一民族をとるナショナリズムと関係する「民族学」とも異なる立場をとります。民俗学は、日本列島各地の風土にあわせたそれぞれの地域文化の個性を採取します。つまり、**日本文化の複数性**を丹念に記録しようとする学問であると言えます。

2. 民俗文化と地域づくり① 岩手県遠野市の事例

以上のように、わたしが調査対象とする2つの地域は、柳田国男にはじまる民俗学史との少なからぬ影響関係のもとに地域づくりを実践してきました。そこで次に、わたしがそれぞれの調査地で発見した民俗学と地域づくりの現在をお伝えします。地域づくりの実践には、これから民俗学および民俗資料を生かしていくためのヒントがたくさんありました。

わたしは遠野で、次のような語りを複数の地域住民より聴きました。「遠野の河童が赤いのは、昔飢饉があったときに口減らしのために生まれたばかりの赤ちゃんを川に流した風習に依る。人間の赤ちゃんだから河童は赤い。」河童にまつわる民話を通して地域の冷害・飢饉誌を史実として語る言説は、一体どこから生まれたのでしょうか。言説の確立に至るまでを追いました【表1】。

年	遠野のできごと	思想史	日本のできごと
1908		柳田と喜善が出会う。遠野の口承文芸の聞き取りはじまる	
1910		『遠野物語』350部発刊。 柳田が知己のみに配布	日韓併合条約 大逆事件
1914	第一次世界大戦		第一次世界大戦
1918			米騒動
1933	三陸地震	佐々木喜善逝去	国際連盟脱退
1934	冷害・豪雨による大凶作		
1935		『遠野物語』増補版発刊。 広く一般の読者に普及。 柳田が雑誌『民間伝承』創刊	
1945	太平洋戦争 終戦		太平洋戦争 終戦
1962		柳田国男逝去	
1968		吉本隆明『共同幻想論』発表。 『遠野物語』と神話の比較進む	
1970	岩手国体。アンノン族の観光地として定着。「日本のふるさと」イメージの確立	『定本 柳田国男集』発刊	JRによる「ディスカバー・ジャパン」キャンペーン開始
80-'90		小松和彦、赤坂憲雄らによる 「異界」イメージの創出。『異人論』『異人論序説』ほか	
1993	冷害による大凶作		
1997	歴史考証進む。遠野常民大学『注釈遠野物語』発刊		
1999		赤坂憲雄が雑誌『東北学』創刊	
2012	異界・妖怪イメージによる地域づくり進む	『遠野物語』がパブリックドメインになる。二次創作進む	
2011	東日本大震災		東日本大震災

※遠野出身の郷土史家・佐々木大輔との談義（2023）に基づく。佐々木は『遠野物語』そのものの出版状況により、遠野物語史を次の4つに時代区分した。オリジネーターの時代（1908-1935）、フォロワーの時代（1935-1962）、アカデミシヤンの時代（1962-2012）、クリエイターの時代（2012-）へと時代区分を行った。これにより、地域づくりと一体の遠野物語史（ひいては日本民俗学史）をクリアに追うことができる。

【表1】『遠野物語』と遠野の地域づくりの変遷

遠野は民俗学史のただ中であって、一方では研究史を利用した地域づくりを推進し、他方では地域住民による内発的な地域研究の成果を残し、アカデミアにも多大な影響を及ぼしてきました。その過程で、河童という幻想とされてきた生物と、現実のできごとである冷害・飢饉そして口減らしの慣習が堅く結びつけて語られるようになりました。これは、『遠野物語』にみられる物語の要素をなるべく取り除き、徹底的に事実として語ろうとする運動であると言えます。



「民話は文字の読み書きもできない貧しい人の話」「埋もらされてきた人の話」と語る地域住民(2代目カッパおじさん, 2021)

その一方で、『遠野物語』のファンタジーとしての要素に魅力を見出し、その行間を読むような創造的な運動も起こりました。とりわけ『遠野物語』が著作権フリーとなった2012年以降、この運動は多声的になっていきます。「日本のふるさと」として地方暮らしの理想郷のようなイメージをもつ遠野とはいえ、2000年代には昔ながらの語り部や農家はほとんどみられなくなっていました。そこに、『遠野物語』に語られた素朴な農民の生活を、芸術的な創造力によって復興あるいは新たに創造しようとする運動が起こるのです。アートの力による民俗文化の復権と言えます。ここでは、わたしが遠野で参与観察していた『遠野物語』を利用した芸術展をご紹介します。

芸術展は「Iwate, the Last Frontier -辺境に差す、はじまりの光-」と題され、『遠野物語』13話に登場する猟師「縫（ぬい）」の伝承をもとに創作した物語が展示されました。新たな物語を執筆したのは移住者の男性です。彼は広告代理店での勤務経験を活かし、移住後は遠野のブランディングを行っていました。その一環で『遠野物語』による企画を受注することになったのですが、最初に考案した企画で「まるで『遠野物語』のことをわかっていない！」と地域住民からバッシングを受けます。そのときに地域史家から「本は一旦置いておいて、とにかく野に出よう」と提案されフィールドワークに出かけます。『遠野物語』の現場である河童の出る川や座敷童子が住んだ屋敷を巡り、物語が実際の遠野の生活と接続していることに気づきました。例えば、遠野の屋敷神であるオシラサマは馬と人娘との二神一對の神なのですが、遠野の住居の構造では一つ屋根の下に人間の生活空間と馬小屋が同居しており、人間と馬とは親密な関係なのです。住環境がそのまま信仰に反映されていることがわかります。これまで『遠野物語』を読んでも何が面白いのかさっぱりわからなかったという彼は、物語の現場を歩くことで『遠野物語』の楽しみ方を教わったのでした。



芸術展「Iwate, the Last Frontier -辺境に差す、はじまりの光-」制作風景。物語を執筆した富川岳氏（移住者男性、左上）、イラストレーションを描いた五十嵐大介氏（漫画家、右上）、湿板光画という古い写真技法で写真を撮影したエバレット・ブラウン氏（写真家・作家、左下）（すべて 2021）

このようにして、移住者は『遠野物語』研究と研究成果を用いた事業を企画しはじめます。芸術展「Iwate, the Last Frontier -辺境に差す、はじまりの光-」は、彼とその仲間たちが企画したはじめての大型芸術事業でした。彼は『遠野物語』13話「山の霊異」に登場する猟師についての歴史考証をはじめます。この猟師についての伝説は多数記録されており、白鹿を追って千日山にこもった、妖怪青入道と知恵比べをした、とされる謎多き人物です。一方で、猟師の家系は特定されており、その家文書をたどった結果、猟師が遠野を境とする南部藩と伊達藩の間で暗躍した武者であることが判明しました。史実を突き止めた移住者は、縫の伝説と史実を往還する物語を完成させ、その物語に添えるイラストレーションを漫画家の五十嵐大介氏に依頼しました。物語に加えて、今の岩手の魅力を伝える若き職人や芸能者を、昔の写真機で撮影したエバレット・ブラウンの写真群を展示しました。



芸術展「Iwate, the Last Frontier -辺境に差す、はじまりの光-」展示光景。
遠野ふるさと村の古民家に物語・イラストレーション・写真が並んだ（2021.10）

今では、この移住者男性は民俗学者や文化人類学者を巻き込んで、民俗学による地域づくり事業をプロデュースしています。以上のように、遠野は、アカデミアによって形成された地域のイメージとうまく付き合ってきた自治体であり、民俗学と地域づくりが渾然一体となっていたのです。そのおかげで、地域住民ひとりひとりが地域の文化資源である『遠野物語』および「民話」の使い方をよくご存知です。（実は、『遠野物語』そのものは読んだことがないという人がほとんどなのですが。）河童や座敷童子などの"王道"の民話については、皆さん学校教育や市民劇、語り部活動をとおして知っており、民話は遠野のものであるという自負があります。今日では、新たな観光資源と『遠野物語』のかけ合わせも盛んに行われています。

3. 民俗文化と地域づくり② 宮崎県椎葉村の事例

最後に、現在のわたしのフィールドである宮崎県椎葉村と民俗学の関係を追っていきます。椎葉村は柳田最初の民俗誌『後狩詞記』の舞台であると前に述べました。柳田が椎葉村を訪れた理由のひとつに、柳田の関心が農村社会の生業にあったことが挙げられます。椎葉巡見当時の柳田は農商務省（現在の農林水産省）に勤める政府の官僚でした。柳田は、東大法学部を卒業し官僚になったエリートコースまっただ中の人であり、研究者ではなかったのです。柳田は出身地の兵庫県で経験した飢饉を強く記憶しており、「何ゆえに農民は貧なりや」（柳田 1935）という課題から自らの学業を出発させました。柳田は農商務省で農業組合に関わる法制度の整備に関わっており、全国の農村社会を遊学していました。その旅先のひとつが、ここ椎葉村だったのです。九州周遊の道中、柳田は各地で椎葉山についての噂話を耳にします。焼畑農業をしているらしい.....焼畑の山に自生する茶を商品作物としているらしい.....等々。今でも椎葉村の生業として継承されている焼畑農業は、当時でさえ日本列島において稀少な民俗文化だったのです。

数々の噂話をもとに訪れた椎葉山で、柳田が発見したものは狩猟の故実を記録した古文書でした。この文書をもとに記録した『後狩詞記』には、現役の猟師が継承する山の儀礼作法が多く残っています。例えば、猟師が山に入る前になるとなる唱教や猪が獲れたときに山の神に捧げる祭祀は現在も伝承されています。猟師が獲物に気づかれないように振る舞うために山中で使用する山言葉も、現在も使用されているものです。「ハエ」（山の中腹）や「ニタ」（猪が身体を擦り付ける泥沼）といった、山中の地形を指し示す言葉は今の地名や屋号にも名残があります。

椎葉村は、柳田の時代から現代に至るまで、中世以前にまで遡る民俗を伝えているという点で、民俗学的に際立った特徴をもっています。狩猟焼畑は縄文時代から続く生業とされています（このあたりは考古の先生方から教わりたいことです）、神楽や臼太鼓踊りといった芸能は平安期にまで遡ると言われています。こうした生業や祭祀は、伝統技法や近代技術、神道や仏教といったさまざまな対立的なことがらをどちらもうまく共生させ、独自に融合させ、絶えず変容しながら持続してきました。

わたしは村にある椎葉民俗芸能博物館の学芸員を務めています。当館の特徴は、まさに展示内容のすべてが現在も暮らしのなかに息づいているところにあります。これは全国の多くの歴史民俗資料館とは異なる状況ではないでしょうか。博物館がオープンして28年が経つのですが展示内容は古びておらず、充実した調査研究のもとに制作されたのだな、と毎日館内を観ながら感心しています。実際に、神楽（本田安治 1962）、狩猟（千葉徳璽 1969）、焼畑（野本寛一 2004）など各分野で厚い民俗誌が描かれています。調査の成果により椎葉神楽は村内26ヶ所がそれぞれ独自の



椎葉民俗芸能博物館外観（2023）。人口2,200人の山村に4階建ての博物館が建つ

舞や拍子、神事を継承していると明らかになり、国指定無形重要文化遺産（1991）に登録されました。現在も約半数の保存会が夜通しの神楽祭を催行しています。焼畑農業は世界農業遺産（2015）に登録され、村外機関による調査研究と村内団体による継承活動が進んでいます。小学校での焼畑実習も50年におよぶ歴史があり、地域住民が児童と学校の先生に向けて焼畑の技術を教えています。こうした実践は、地区の消防団や青年団、婦人会、PTAなど総出で行われています。文化継承のために各自仕事の休暇が取りやすい、あるいは業務として行事に参加すべきという空気が醸成されていることが、村の暮らしを成立させる大切な基盤になっています。

わたしは当館展示を気に入る一方で、せっかく椎葉に来られた方には博物館ではなく、村の方々とおしゃべりしたり山に入ったりと、実際の暮らしの現場をご案内したいと考えています。村にはコンビニがなくスーパーが1軒のみ、日曜は営業していません。しかし各地区に小さな商店が点在し、地元の方が必要とされる品々（食糧、農機具の部品、水道管など）だけを揃えています。資本主義的に大量生産大量消費をしなくてよい椎葉の生活は、真にサステナブルではないでしょうか。山奥暮らしは一見不便であり土砂災害也多発しますが、だからこそ住民ひとりひとりがインフラ技術を手放していないことが強みです。山水を引いてくる、道路を整備する、家や神社を建て直す.....等々。そして、こうしたインフラ整備を行うにはやはり共同体のつながりが不可欠です。生活技術を手放していないことと、共同体の紐帯を維持していること、この2つが椎葉文化の重要性であると考えています。



焼畑火入れの様子（2024）。山林の足元の腐葉土を灰にして養分とし、雑穀を栽培する

おわりに

民俗学史に名を残す2つの地域での研究と暮らしの往還をご覧いただきました。遠野では現代的文化が参入し近代以前の生活様式の多くが消失してしまった一方で、民俗文化がアートという新たな展開をみせていました。一方の椎葉は近代以前の生活を今にまで伝えており、共同体の維持について学ぶところが多い地域です。

緻密な民俗調査を実践しその成果を住民が利用することは、どこの地域でもできることです。わたしはこれが民俗学の強みだと考えています。人間は衣食住を手放すことはできません。日常生活が営まれている以上、どこでだって民俗調査はできます。わたしは民俗と民俗学をこれからどうするのか、研究者としても生活者としても考え続けていこうと思っています。

【参考文献】

- 柳田国男. 1935「郷土生活の研究法」1998『柳田国男全集』28巻. 筑摩書房
柳田国男. 1957「日本文化の伝統について」『近代文学』
谷川健一. 1962「柳田国男の世界」『日本読書新聞』1962年8月20日号
本田安治. 1962『民俗芸能 郷土に生きる伝統』社会思想研究会出版部
後藤総一郎. 1964「柳田国男と常民・天皇制・学問」『思想の科学』1964年4月号. 思想の科学社
千葉徳璽. 1969『狩猟伝承研究』風間書房
伊藤幹治編. 1972『現代のエスプリ 柳田国男』57. 至文堂
野家啓一. 1996『物語の哲学 柳田国男と歴史の発見』岩波書店 *第2章は本書に着想を得ている
野本寛一. 2004『山地母源論』I. 岩田書院
斎藤幸平. 2019『大洪水の前に マルクスと惑星の物質代謝』堀之内出版